

## 「鴨島はまぐり」を絶やすな！

— 持続可能な漁業を目指して —

漁業協同組合 J F しまね  
益田蛤の会 大賀 初巳

### 1. 地域の概要

島根県益田市は島根県最西部に位置し、平成 16 年に旧益田市、旧美都町、旧匹見町が合併して誕生した。北は日本海を望み、南は中国山地に至り、また、「万葉の歌人」柿本人麻呂や「画聖」雪舟のゆかりの地であるなど、豊かな自然、歴史、文化を有している。

私たちが住んでいる益田市中須地区は、平成 22 年に全国の一級河川で水質日本一となった高津川の河口域に位置する。(図 1)

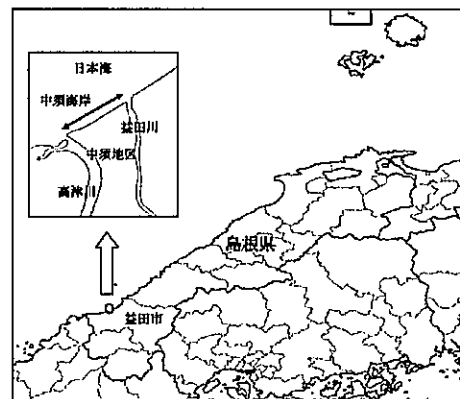


図 1 益田市中須地区の位置

### 2. 漁業の概要

私たちが所属する漁業協同組合 J F しまね益田支所は正組合員 182 名、准組合員 455 名で構成され、平成 22 年の水揚げ量は 1,200 トン、水揚げ金額は 3 億 2,000 万円である。主な漁業種類は、まき網、採介藻、定置網、船曳網、一本釣りである。

### 3. 研究グループの組織と運営

益田蛤の会は、平成 20 年に益田市中須海岸でハマグリを漁獲する漁業者 11 名で結成され、現在の会員数は 14 名である。会では、ハマグリ資源の保護増殖及び販売対策に力を注ぎ、漁村の発展に寄与することを目的として各種活動を行っている。

### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私たちの漁場である中須海岸は、遠浅な砂浜が広がり昔からチョウセンハマグリ(以下、「ハマグリ」と略す)がよく漁獲されていた。しかし、昭和 30 年代初めから漁獲量が年間 1 トンに満たないほどに減少し、以降資源量は低水準で推移していた。その後、幸いにも平成 10 年頃から資源回復のきざしがみられ、漁獲量が平成 15 年には 5 トン近くに達した。(図 2) 漁獲量が次第に伸びていく過程で、私たちは過去の資源の減少を教訓として、益田のハマグリ漁をいかに末永く続けていくかを考え、持続可能な漁業を模索していくこととなった。

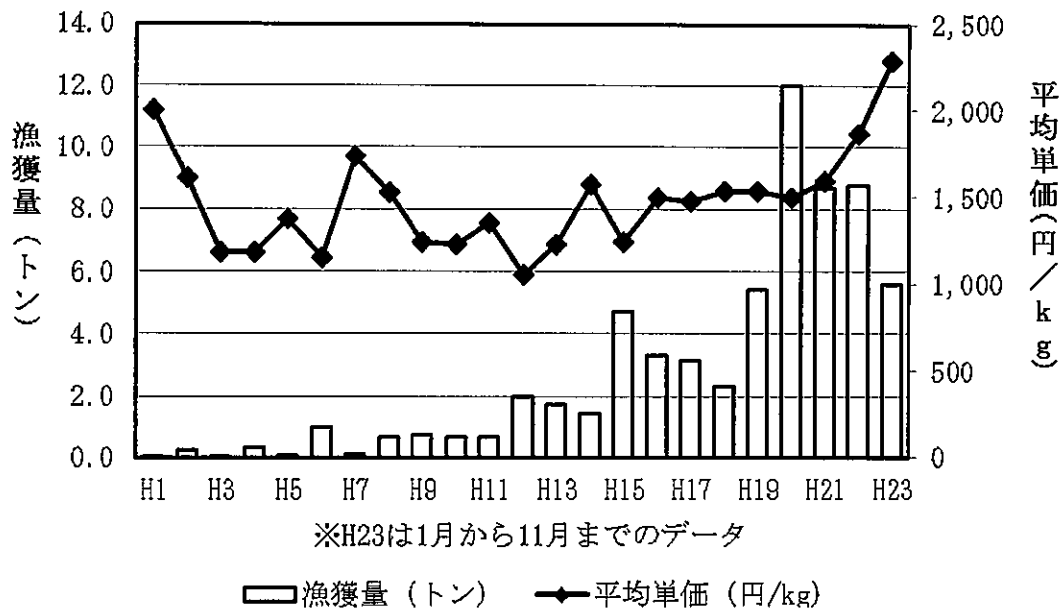


図2 JFしまね益田支所管内のハマグリ漁の漁獲量と平均単価の推移

5. 研究・実践活動状況及び成果  
(資源管理の取り組み)

私たちは、中須海岸が海岸線距離で1.5kmとごくわずかな漁場であり、おのずと資源量は限られていることを念頭に置いた。そして、ハマグリ漁を永続的に行っていくためには、漁獲規制を徹底させた資源管理の取り組みを推進していく必要があると考えた。まず、漁法については、一度で大量に漁獲してしまう鋤簾や桁を使うのはさけ、当地の伝統漁法であった小舟を操り、鉾で貝を1つずつ漁獲する磯見漁に限定することとした。(図3) 磯見漁は海底に潜むハマグリを箱めがねで見ながら漁獲するため、波高が1m以下の風で潮が澄んでいる時にしか操業できない。そのため、漁法自体に漁獲圧の抑制効果があるといえる。次に、漁獲サイズについては、県漁業調整規則においては3cmを超える個体を漁獲できることになっているが、私たちは鉾で獲ることのできる7cm以上の大型貝のみを漁獲対象にすることとした(図4)。

また、平成15年からハマグリが第一種



図3 磯見漁の操業



図4 7cm以上の大型貝

共同漁業権対象種となったことから、密漁対策として警察の協力を得ながら夏場を中心にパトロールを行っている。

これらの、資源管理の取り組みは、当初はハマグリ漁を営む有志漁業者の自主規制、自主活動として始まったが、平成20年の益田蛤の会結成を機に、規約として明文化し、会の活動として推進していくこととした。規約には従来の自主規制に加えて操業時間と1日あたりの漁獲量の規制を盛り込んだ。操業時間については平成20年からは夏場3時間、冬場5時間を上限とし、平成22年からは夏場2時間、冬場3時間を上限とした。冬場に比べて夏場の操業時間を短くしたのは、産卵期の漁獲圧を抑えようと考えたからである。平成22年に県水産技術センターが行った調査により、産卵期は7月から9月であること、また、産卵盛期は7月から8月であることが推定され、私たちが設定した夏場の操業時間短縮の妥当性が確認された。また、1日あたりの漁獲量については、平成22年からは12Lバケツ1杯(約10kg=約4箱分)を上限とした。なお、規約の改正は毎年会員で話し合いのうえ、資源状況などを勘案して行っている。

これらの、取り組みにより今のところは大型のハマグリを安定的に漁獲することができている。

#### (販売対策の取り組み)

資源管理とともに私たちが力を入れて取り組んだのが、販売対策の取り組みである。資源を維持するために漁獲規制を行ってもハマグリ漁が生業として成立するためには、販売単価の安定・向上が必要であると考えた。

まず、出荷方法については、以前は漁獲物を蓄養などせずに獲った翌日に漁協の地元市場に出荷していただけであった。この方法だと出荷量を調整できず、荷が少ない時や引き合いが多い時はある程度の単価で売れたが、風で出荷量が多い時は値崩れを起こしやすかった。そこで、漁協の活魚水槽を利用して漁獲物を蓄養し、市場のニーズや相場をみながら出荷調整ができる体制を整えた。(図5)そして、1日あたりの出荷量については供給過剰にならないよう、1人あたりとしては、平成20年からは5箱

(約12.5kg)までとし、その後、単価の推移から判断して、現在では2箱(約5.0kg)までとしている。また、市場に上場する総出荷量についても、会員同士で申し合わせのうえ、調整を行っている。さらに、風の日が続いて蓄養数量がダブつくようであれば、会員同士で相談して、漁止めを行うこととしている。



図5 ハマグリを蓄養する水槽

次に、単価の安定・向上には、販売店や消費者への販売促進が必要であると考え、漁協、行政と連携してブランド化の取り組みを推進している。私たちは、まずは、地元でハマグリを食べてもらいたいと思い、地元スーパーと連携して、チラシで告知した販売予定日にハマグリを確実に供給できるよう努めた。その結果、スーパーでハマグリを継続的に取り扱ってもらえることとなり、地元での知名度向上につながった。また、平成22年にはブランド愛称の一般募集を行った。全国から220点の応募があり、選考の結果ブランド愛称は柿本人麻呂の終焉の地であり、かつて中須海岸の沖合に存在したといわれる鳴島にちなんだ「鳴島はまぐり」に決定した。さらに、一般市民や観光客がハマグリを購入したり食べられる店がひと目で分かるよう、ポスターとノボリを作成し、地元小売店や飲食店に配布して、「鳴島はまぐり」をPRしている。(図6、図7)

これらの一連の取り組みは、マスコミにより度々取り上げられ、私たちのハマグリは知名度は飛躍的に向上した。そのため、ハマグリは購入希望者が増加し、市場での単価も向上している。

### 6. 波及効果

私たちの活動は、地元小学校の環境学習やNPO法人の活動で取り上げられる機会が多くなり、またハマグリに関連した催しも盛んに実施されるようになった。

平成21年からは漁協職員の働きかけにより、地元のNPO法人アングンテ21が稚貝調査を行って

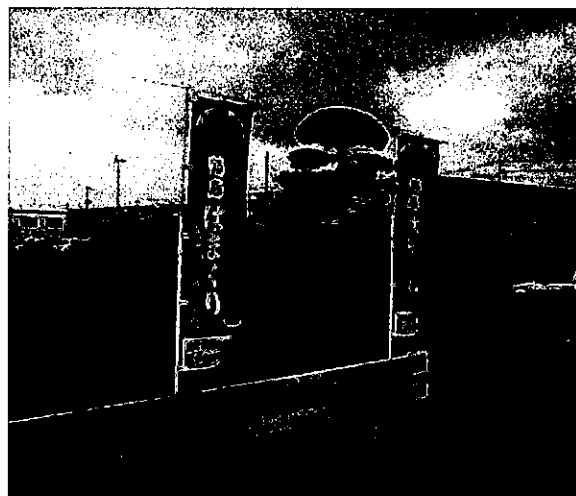


図6 「鳴島はまぐり」のPRノボリ



図7 ブランド愛称の決定を紹介する新聞記事

る。この調査は、中須海岸とその周辺海域において稚貝の生息状況を把握し、数年後に漁獲対象となる貝の資源量を推定することを目的としている。調査方法は、波打ち際で採集した稚貝の殻長を計測し、年齢査定を行っている。(図8、図9) この取り組みは、市民参加型環境啓発活動として多数の人々の協力を得て実施されている。このような調査は、漁業関係者だけで行うのは難しく、ハマグリに興味を持った人が参画してくれるのは大変ありがたいことである。資源管理と販売対策の取り組みは、漁協、行政関係者と連携して手探りに進めてきた結果、近年では漁獲の安定や単価の向上で一定の成果が現れたと思う。しかし、私たちの実践してきた活動は、主に漁獲状況と相場を判断材料としたもので、科学的な資源量調査等によるものではない。特に、資源管理については、科学的な知見に基づいた適正な取り組みを推進していく必要がある。そのため、今後もこの調査に大きな期待を寄せている。

また、見事な大きさのハマグリが獲れることが、海のみならず、海に流れ込む清流高津川やその流域の森林の豊かさを象徴していると考えられることから、森・川・海全体の環境を大切にしながら地域振興を図ろうとする機運も高まっている。私たちも、



図8 稚貝調査を紹介する新聞記事



図9 稚貝調査 (左図：採集のようす、右図：採集した稚貝)

植林活動への参加など森や川の環境改善にもつなげる活動に引き続き協力していきたいと考えている。

平成 22 年からは、NPO 法人アンダンテ 21 がハマグリ貝の殻に絵を描いたアート作品の展示会を開催している。展示作品は一般公募され、多くの人々から優れた作品が応募されている。私たちは作品のキャンパスとなるハマグリ貝殻を提供しているが、貝殻から見事な芸術作品が生まれ、また、展示会が多くの人々に周知され、素晴らしい催しであるという声を多数聞き、大変うれしく思っている。(図 10)



図 10 ハマグリ貝アート展

#### 7. 今後の課題や計画と問題点

今後の課題としては、今までの取り組みを継続、発展させていくことである。近年は、毎年のように新規着業希望者が現れているが、ブランド化などの活動が多くの人々の注目を集めたことが要因であると思われる。新規着業希望者には、私たちの活動の趣旨を正しく理解してもらうことが重要であると考えている。

ハマグリ漁は、漁場環境を保護し、また、漁業活動に対して理解、協力していただいている多くの人々に支えられて成り立っていると実感している。そのため、私たち益田蛤の会は漁業権を行使してハマグリを漁獲する漁業者として、適正な資源管理を継続して行い、持続可能な漁業を推進していくことに努めたい。